今週の倫理

2023.9.2〜9.8

9月のテーマ ｜ 気づきをいかす

1349号

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一―一九九九）のことばを掲載いたします。

気づいたことは自分から

丸山竹秋

E夫人は、きちょうめんな人だ。彼女がいちばん気にかけるのは玄関のはきもののことである。

勝手口のほうならともかく、玄関に、ぬぎっぱなしのはきものが乱雑におかれてあるのは不快だ。もし、こうしただらしのないところへ、ふいに来客があったりしたら、恥ずかしい限りである。そう思うので、子供たちが、はきものを乱しておくのをみるとすぐに小言をいうのだが、なかなか言うことをきかない。彼女は夫にたいしても、「はきものは、きちんと、そろえておきましょうよ」

とそれともなく注意をするのだが夫は、フンといったような顔をするだけで、じっさいの効果は少ない。夫がこうだから、子供たちもだらしがないのだと、彼女はプリプリしながら、日に一回くらいは、しかたなしに、自分で、はきものをそろえなければならない。

こうした生活を長いことつづけていたが、ふとした心持の変化から、彼女は、つぎのように改めたのであった。

夫や子どもたちを責めているのが、いけないのだ。このようにやかましくいっても、なかなかきかないのだから、これからは、はきものが乱れているなと気づいたときには、いつでも、自分から進んで直してあげることだ。それは彼女にとっては、百八十度くらい方向のかわった行き方であった。純情な彼女は、そう考えたら、その通りに実行し始めた。お手本を示してやるのだといったような偉ぶった気持でもなく、また、こうしてやれば子供たちも見習うだろうといったような、結果を期待しての心からでもなかった。まず、乱れていると気づいたときは、どの子のはきものでも構わず、自分から進んで、よろこんで直してやった。

こうして彼女は、よろこんではきものをそろえてやるのだった。ところが、彼女が、このようにし始めてから、いつのまにか、はきものを子供たちが、ぬぎっぱなしにしなくなってきたのである。

主婦が、気がついたことを自分から進んで、喜んでするというぐあいに、積極的に変わってくると、子どもたちが、しらずしらずに、その影響を受け、母親の気持が自然に反映して、自分から整頓するようになった。今までは、しかられている、責められているといった感じと、甘える気持もあって、言うことをきかなかったのが、母親のまごころを受けて、きちんとせざるを得ないように変わってきたのである。

私たちの日常生活の中には、気づいたことを、自分から進んで、それもいやいやでなく喜んで行なうと、意外な好結果をもたらすことが、たくさんある。自分の心意というものは、その人に反映するものだからである。（「幸福の決め手」より）

え・城谷俊也

一般社団法人倫理研究所法人局